Niigata University

養にて Campylobacter jejuni が陽性で，Campylobacter 腸炎と診断した．8月30日より LVFX 内服開始して下痢は軽快したが，その頃より左側胸部に皮膚潰瘍が出現した．壊疽性膿皮症（以下，PG）と診断したが，皮膚潰瘍は急速に増悪した．PG に対して PSL を 60mg/日まで増量するも改善が乏しく，シクロスポリン 200mg/日を併用したところ，徐々に皮膚潰瘍の上皮化が進み，縮小した．この間，UC の増悪は認めなかった．ステロイド抵抗性壊疽性膿皮症に対し，シクロスポリンは有効な治療法と考えられた．

13 出血性放射線性直腸炎に対するアルゴンプラズマ凝固療法の有用性に関する検討

夏井 正明・阿部 聡司・岩永 明人
玄田 拓哉・姉崎 一弥・本間 照
関根 輝夫
県立新発田病院内科

今回我々は出血性放射線性直腸炎（以下，HRP）に対するアルゴンプラズマ凝固療法（以下，APC）の治療成績について検討したので報告する．対象は 2003 年 1 月から 2005 年 12 月までに APC により治療された HRP 11 例．APC は下血が消失するまで 2, 3 ヶ月ごとに繰り返した．治療前後の臨床的重症度（Zinicola らの分類に従い Grade 0 から 4），内視鏡的重症度（Ben - Soussan らの分類に従い Grade 0 から 3），ヘモグロビン濃度を比較した．APC の平均施行回数は 2.1 回，合併症は出血を 1 例に認めたのみであった．14.2 ヶ月の平均観察期間で臨床的重症度は 2.6 から 0.1，内視鏡的重症度は 2.4 から 0.8 と有意に低下し，ヘモグロビンは 10.1g/dl から 12.6g/dl と有意に上昇した．HRP に対する APC は有用かつ安全で，第一選択となり得る治療法と考えられた．

14 胆嚢扁平上皮癌および胆嚢腺扁平上皮癌の 2 症例

坪井 清孝・中村 厚夫・八木 一芳
関根 厚雄・角田 和彦*・伊藤 寛晃*
田宮 洋一*・黒崎 功**
梅津 哉***・永橋 昌幸****
味岡 洋一****
県立吉田病院内科
同 外科*
新潟大学医歯学総合病院第一外科**
同 病理部***
新潟大学大学院医歯学総合研究科
分子・診断病理学分野****

〔症例 1〕67 歳女性．17 年 5 月，近医で腹部腫瘤を指摘され入院．腹部超音波，CT で胆嚢の巨大腫瘤性病変が疑われた．PTGBD 行い，細胞診で SCC が疑われた．血管造影で，腫大胆嚢に腫瘍濃染認め，胆嚢扁平上皮癌の診断で，同年 6 月手術施行．組織は胆嚢と考えられる部位に，扁平上皮癌を認め，検索範囲内で腺癌成分は認めなかった．

〔症例 2〕77 歳女性．同年 11 月，近医で腹部腫瘤を指摘され入院．SCC，シフラの上昇認め，腹部超音波，CT で，胆嚢腫瘍が疑われたが，十二指腸や胃癌の胆嚢浸潤も否定できなかった．胆嚢炎の合併もあり，PTGBD 施行．細胞診では SCC と診断．血管造影行い，胆嚢偏平上皮癌の診断で同年 12 月手術施行した．胆嚢癌の十二指腸浸潤であった．組織では，一部腺癌も認めたが，腫瘍の大半は扁平上皮癌部で占められていた．胆嚢癌は腫瘍が増大していても，積極的な組織学的診断を行い，扁平上皮癌が疑われる場合は，外科治療を検討するべきであると考えられた．

NII-Electronic Library Service